第62回 中日理論言語学研究会2024.9.21

文法研究は現実世界とどうつながるか
―〈意志〉の問題を例に

高山善行（福井大学）

主張

1．文法研究は、現実世界との関わりを前提とする。研究の基盤を問い直すには、その関わり方を検討する必要がある。

2．〈意志〉について行為論の観点から光を当てると、概念が明確になり、〈可能〉との関係が捉えやすくなる。

3．文法研究と現実世界との関係を考える上では、表現形式の記述分析に加えて、運用面の研究が重要になる。

1．はじめに

(1)用語

「文法研究」＝日本語記述文法

参考：日本語記述文法研究会編『現代日本語文法１～７』くろしお出版

「現実世界」＝日常の生活場面

2．現実世界と文法

(2)私たちは、現実との関わりの中で、言語を利用することによって、考えたことや感じたことを明確にしたり、意志や要求などを相手に伝えたりしている。このような活動が言語活動である。→「談話」「文」

『現代日本語文法１　総論』第１章「文法とは何か」：3

(3)文には、分化・未分化を問わず、話し手が外在・内在的世界との関係で描き取った〈対象的な事柄的内容〉と、〈対象的な事柄的内容をめぐっての話し手の主体的な捉え方〉および〈話し手の発話・伝達的態度のあり方〉とが含まれている。

仁田義雄(2016)：「第１章　文について」:16

(4)疑問
　文法研究は、現実世界のどの範囲を、どのように写し取っているのだろうか。

外部視点（関連学問分野）から考えてみる

３．事例研究―〈意志〉をめぐって

(5)意志のモダリティは、発話時において話し手が自分自身の行為を決定したことを表すモダリティである。意志のモダリティを表す文を意志文という。意志のモダリティを表す主要形式は動詞の意志形「～しよう」、非過去形「する」である。

『現代日本語文法４　モダリティ』：51

３．１　文法の常識

(6)カレーを食べよう。〈意志〉→〈行為〉

〈意志〉＝〈行為〉を決定する心的状態
〈行為〉＝カレーを食べること

〈意志〉は〈行為〉に先行する心的状態

(7)実在性

a.（朝の通勤で）家を出よう。
b.（同上）駅まで歩こう。
c.（タクシーを拾うとき）手を上げよう。
d.（大谷翔平の速球に）バットを振ろう。
e.（買い物で）自転車に乗ろう。

〈意志〉という心的状態は、実在するのか？

(8)場面性

意志発話（内言）は、生活のどの場面で使うのか？

〈意志〉は文法の基本概念であるが、よく分からないまま使われている？

概念の検討が必要！

3．2　〈意志〉概念について

(9)問題群

a.起源　cf.アーレント『精神と生活（下）』
b.実在を認めない立場（「自由意志と決定論」）
c.始発点が不明　cf.「リベット実験」リベット(2021)
d.分岐問題　　cf.青山拓央(2016)

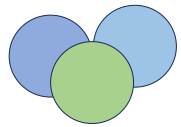
行為論

(10)概念の構造

〈意志〉
- 〈信念〉
- 〈欲求〉
- 〈意図〉

cf.古田徹也(2013)

発表者のイメージ



〈意志〉は、複合概念

[追加スライド] 行為の分類（古田2013:19）

- **行為**
  - **意図的行為**
    - **自覚的意識あり**(学級委員立候補で葛藤の末に手を挙げる)
    - **自覚的意識なし**(通学で歩く際足を動かす)
  - **意図せざる行為**(注意を怠ったドライバーが飛び出した子供をひいてしまう)
  - **非行為**(寝返りをうつ、気絶して倒れる、思わずくしゃみ)(運動・反射)

(11)概念と表現形式

[表現形式]

〈意志〉
- 〈信念〉→「モノダ／ベキダ」
- 〈欲求〉→「タイ」
- 〈意図〉→「ウ・ヨウ」

複合概念を表現形式へ分割配分

↓

表現形式の意味を概念名で登録

なぜ、「〈意志〉→〈行為〉」なのか。

(12)文法常識の形成

a.理論的要因

主客二元論（「心」「行為」を分離）

b.実践的要因

文法の知識（文法教育？）

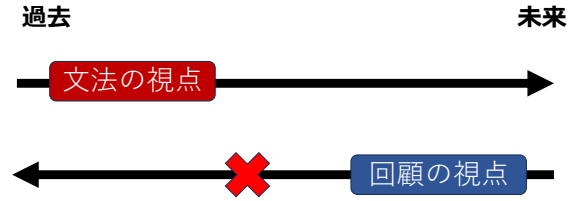
(14)文法の知識

a.英語法助動詞「will」〈意志〉〈未来〉
b.古典語「ム」〈意志〉〈未来〉
c.現代語「～シヨウ」「基本形」〈意志〉〈未来〉

↓

〈意志〉と〈未来〉の一体化

(15)視点の固定化



(16)視野狭窄

回顧の視点を欠くと、〈責任〉〈倫理〉とつながらない

↓

社会性の側面が欠如、他分野との対話困難

3．3　〈意志〉と〈可能〉の関係

(16)概念の近接性

〈意志〉
- 他行為可能性 → 状況可能／潜在可能
- 自己コントロール性 → 能力可能／実現可能

戸田山和久(2014)

(17)概念間の関係

a.（泳げる人が）「これから３キロ泳ごう／泳ぐぞ」
b.（全く泳げない人が）？「これから３キロ泳ごう／泳ぐぞ」
c.（水泳部の部員に）「毎日３キロ泳ぐべきだ／泳げ」
d.（全く泳げない人に）？「毎日３キロ泳ぐべきだ／泳げ」

〈可能〉は、〈意志〉〈義務〉の前提となる

(18)現代語研究と古典語研究

現代語研究：〈意志〉＝モダリティ論、〈可能〉＝主にヴォイス論

cf.川村大（2004）、林青樺（2007）など

古典語研究：助動詞の意味記述

「ベシ」：〈義務〉〈可能〉〈意志〉〈推定〉〈当然〉〈様態〉
「ム」：〈意志〉〈推量〉（〈可能〉で訳せる場合がある）

cf.高山善行(2021)

(19)実例

a.我はかくて閉ぢこもりぬべきぞ。(更級日記・)
（私はこうして引っ込んでしまうつもりだ）〈意志〉
b.身を隠すべき宿求めてむ。(伊勢・59)
（身を隠すことのできる宿を探そう）〈可能〉
c.恋しきときの思ひいでにせむ（古今・48）（（梅の花が）恋しくなったときの思い出のよすがにしたいから）〈意志〉
d.明日さへ降らば若菜摘みてむ（古今・20）
（明日も雨が降るなら、いよいよ若菜を摘むことができるようになるだろう）〈可能〉

(20)古典語（中古語）の可能表現

[A]特定形式方式：文法形式「ル・ラル」
語彙形式「副詞工」「補助動詞ウ」
[B]文脈依存方式：「住めば住みぬる」など。
cf.佐伯梅友(1958)「結果的表現」、吉井健(2018)

「ル・ラル」〈尊敬〉〈受身〉〈自発〉〈可能〉

「ル・ラル」も文脈依存。[B]が基本と考えられないか

(21)文脈依存方式

a.いまいく日ありて若菜摘みてむ（古今・18）

(あといく日したなら若菜が摘めるのでしょう)

b.あはずはなにを玉の緒にせむ（古今・483）

(思う人に逢えない時は、何を命の綱として生きていかれよう)

c.誰かことごとわきて折らまし（古今・336）

(誰が花と雪とを区別して、これを手折ることができようか)

d.わが身とともにあらむものかは（古今・112）

(私も花も共に生きながらえられるものではないのだから)

cf.中村幸広著・碁石雅利編(2022)が７種の表現類型に整理

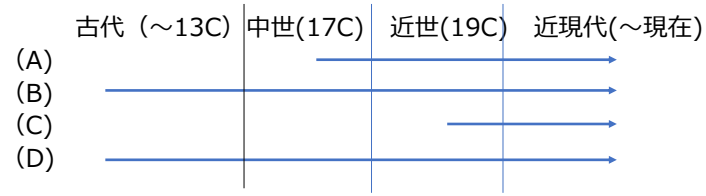
[追加スライド]可能表現の発達史

(A)可能動詞

(B)動詞未然形＋助動詞（レル）・ラレル

(C) デキル

(D) 動詞連用形＋ウル・エル　　cf.渋谷(1990)



(22)a.そのとき手紙が書けたのに、書かなかった。〈潜在可能〉

〈意志〉×　〈可能〉○

b.昨日ようやく手紙が書けた。〈実現可能〉

〈意志〉○　〈可能〉○

c.昨日ようやく手紙を書いた。

〈意志〉○　〈可能〉○

文は〈意志〉〈可能〉概念を含み、常に文法形式を必要とするわけではない。〈意志〉〈可能〉を明示する場合に文法形式を使う。

(23)海水の塩分

常態では見えないが、水分を蒸発させると顕在化

〈意志〉〈可能〉は文に格納されており、明示が必要なときに発現（＝道具箱のハサミ）

(24)目的論的観点
「フレーム問題」（=無関係な情報をどうやって無視するか問題）cf.デネットの思考実験（ロボットにバッテリーを取りにいかせる指令）

いかに、不必要な形式化を避けるか

〈可能〉の否定優位問題

(25)肯否の非対称性
「可能の肯定表現は、どの時代においてもその用例が少ないのである」渋谷勝己(1990):79

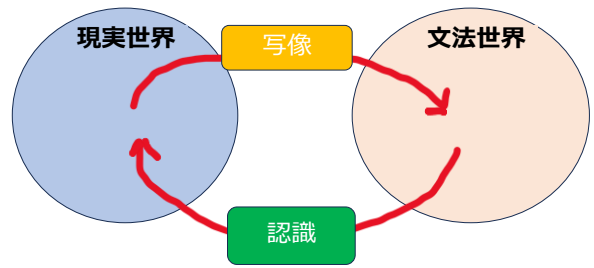
〈可能〉の否定優位は、狭義文法の範囲では説明困難？

運用の観点

(26)（講義終了後、受講生が教員に対して）
a.「来週の講義には出席できません」
b.？「来週の講義には出席できます」
⇒ 必要性

(27)(原稿依頼の断り)
a.「お引き受けしません」
b.「お引き受けできません」
⇒ 対人配慮

４．課題と展望



本発表のまとめ―文法研究の課題

(28)文法概念の内容や概念間の関係が十分検討されているとは言いがたい。外部視点の導入など、工夫が必要である。

(29)現実世界を写し取ってはいるが、対象範囲はかなり狭い。社会性に関わる側面が弱く、写し方に偏りがある。

(30)表現形式の記述分析に基盤をおくのはよいが、一方で運用面の研究があまり進んでいない。

5．おわりに

「メタ文法研究」が必要！

主な参考文献

井上優(2024)「可能文の意味について」(より豊かな言語研究をめざす会発表資料)
佐伯梅友(1958)「結果的表現」『古今和歌集』日本古典文学大系、岩波書店.
定延利之(2019)『文節の文法』大修館書店.
渋谷勝己(1990)『日本語可能表現の諸相と発展』(大阪大学文学部紀要33-1)
高山善行(2021)「「べし」の多義性」青木博史・高山善行編『日本語文法史キーワード事典』ひつじ書房.
土岐留美江(2010)『意志表現を中心とした日本語モダリティの通時的研究』ひつじ書房.
戸田山和久(2014)『哲学入門』ちくま新書.
ドレイファス&テーラー(2016)『実在論を立て直す』法政大学出版局.
中村幸広著・碁石雅利編(2022)『文構造の観察と読解』新典社.
仁田義雄(2016)『文と事態類型を中心に』くろしお出版.
日本語記述文法研究会編(2010)『現代日本語文法１～７』くろしお出版.
古田徹也(2013)『それは私がしたことなのか　行為の哲学入門』新曜社.
森山卓郎(2013)「日本語の意志のモダリティ・再論」遠藤喜雄編『世界に向けた日本語研究』開拓社.
吉井健(2018)「「結果的表現」から見た上代・中古の可能」萬葉語学文学研究会編『井手至博士追悼　萬葉語文研究　特別集』和泉書院.
吉田永弘(2019)『転換する日本語文法』和泉書院.
[追加]
大鹿薫久(2004)「モダリティを文法史的に見る」尾上圭介編『朝倉日本語講座６　文法Ⅱ』朝倉書店.
川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬―動詞ラレル形の世界―」尾上圭介編『朝倉日本語講座６　文法Ⅱ』朝倉書店.
林青樺(2007)「現代日本語における実現可能の意味機能―無標の動詞文との対比を通して―」『日本語の研究』3-2,日本語学会.

青山拓央(2016)『時間と自由意志』筑摩書房.
大澤真幸(2019)『コミュニケーション』弘文堂.
川端善明(1982)「日本文法提要１　語と文」『日本語学』1-1,明治書院.
国分功一郎(2017)『中動態の世界―意志と責任の考古学』医学書院.
妹尾武治(2021)『未来は決まっており、自分の意志など存在しない。心理学的決定論』光文社新書
ダニエル・デネット(2005)『自由は進化する』(山形浩生訳),NTT出版.
ハンナ・アーレント(1994)『精神の生活（下）第二部意志』（佐藤和夫訳）、岩波書店.
ベンジャミン・リベット(2021)『マインド・タイム』(下条信輔・安納令奈訳)岩波書店.

[使用テキスト]『古今和歌集』（新編日本古典文学全集、小学館）

これで発表は終わりです。

ご質問、ご意見をよろしくお願い致します。